

寿量品文底大事

問うて云はく、開目抄の上に云はく「一念三千の法門は寿量品の文の底に秘して沈めたまへり」と云ふ意趣如何。

仰せに云はく、当流の相伝これ きわ惟に谷まれり。口外すべからずと雖も末代の為に一筆之を残さん、敢へて聊爾りょうじの義有るべからず。文の底とは他門徒に於ては、平文面には様々の料簡を為すと雖も、聖人の御本懐に於ては全く知らざる者なり。所謂、文の底とは久遠下種の法華經、名字の妙法に、今日熟脱の法華經の歸入する処を志し給ふなり。されば妙樂大師すいだつ積して云はく「雖脱在現具騰本種くとう」云云。

今日靈山会上の熟脱の法華經は我等とくぶんが得分に非ず、断惑証理だんなくしやうりの聖者、三周得悟の為なり。さて下種の法華經は久遠名字の妙法なり。然るを日蓮聖人本因妙の修行の手本として、妙法蓮華經の五字を余行わたに亘さずして下種し給ふ者なり。一毫未断いちごうの我等末代嬰兒の一切衆生、妙法の名字を聞きて持つ処に即身成仏を遂ぐるなり。誠に我等が為に有り難き法相なり。

若し余行に亘さば一部の法華經なるべきなり。夫それを宗旨の本意とは沙汰せざるなり。されば一処の所判に末法に入りぬれば余經も法華經も詮無し、乃至妙法蓮華經に余行を交へばゆゝしき僻事ひがごとなりと遊ばさるゝは此の意なり。秘すべきなり。

南無妙法蓮華經

日 蓮

日 興 記